

HB通信

編集・発行 /
一般社団法人
ひょうご部落解放・人権研究所



〒650-0003 神戸市中央区山本通4-22-25 兵庫人権会館2階
TEL: 078-252-8280 FAX: 078-252-8281
e-mail: blrhvg@extra.ocn.ne.jp URL: <http://blrhvg.org/>



所長の諏訪山だより

虐待の世代間連鎖

子ども時代に親から虐待を受けた人は、自分が親になったときに子どもに対して虐待を行う傾向があると、よく指摘される。いわゆる虐待の世代間連鎖である。このことは、まるで運命であるかのように語られる。たとえば、テレビのワイドショーでは、子ども虐待に関しては専門家でもないコメンテーターが子どもの虐待事件の報道の際にコメントを求められ、宿命的なものとして子ども虐待の世代間連鎖を語ったりする。そのため、子ども時代に親から虐待を受けたという経験のある人は、自分の子どもに虐待をしてしまうのではないかと考え、自身の結婚を躊躇してしまうというケースが少なくないという。虐待の世代間連鎖は、はたして運命的なものであるのだろうか。

虐待を受けた子どもは、親から虐待されるのは自分が悪いからだと考え、自分など生れなかったらよかったのだと、自己評価を低くしてしまうといわれる。自尊感情が育まれないのだ。そのため、大人になったときに互いに対等な大人どうしの人間関係を築くことがむずかしくなる。また、虐待をする親は、子どもの学力や将来について関心が高いわけでもなく、そのことは子どもの低学歴に結びつき、大人になったとき不安定就労につながりやすい。虐待環境から保護され、児童養護施設に措置された場合も、施設児の大学進学率は10%台と低く、不安定就労に就きやすい。不安定就労は転職することが多く、職場で相談相手となり、力を貸してくれる同僚ができにくい。それに加えて、不安定就労による低収入は、生活にストレスを蓄積させる。

このように、子ども時代に親から虐待を受けてきた人は、大人になったときに社会的に孤立しやすく、ストレスフルな生活を送ることが多いので、自分の子どもを虐待してしまう可能性が高くなるのである。

しかし、こうした虐待の世代間連鎖は、被虐待児に対するケアや援助が何も行われなかった場合に起こることで、さまざまな施策によって虐待の世代間連鎖は断ち切ることができるのだ。したがって、虐待の世代間連鎖をあたかも宿命であるかのようにコメントすることは、被虐待児へのケアや援助の意義をみようともしない、あまりにも無責任な言動といえる。

子ども虐待については、社会の関心が高まってきたといわれる。しかし、その関心は虐待を行う親を非難するだけで、虐待を受けた子どもの将来には何ら向いていないのである。子ども虐待の核心から大きく外れた発言があまりにも多すぎる。

所長 石元清英



その女、ジルバ (全5巻)

(有馬しのぶ / ビッグコミックス / 2013年～2018年 / 1～4巻 552円+税、5巻 591円+税)

この漫画の主人公^{うすいあらた}笛吹新は、大手スーパーの倉庫で働く40歳。華やかな本社の売り子から「姨捨て」と呼ばれる倉庫での力仕事に異動となり、恋人に去られ、人生に何の目標もなく、老後の不安を募らせる日々を送っていた。そんな中、偶然「OLD JACK AND ROSES」というバーのホステス募集の貼り紙を見つける。「求む40歳以上」という応募要件に目を疑うが、店は80を過ぎた最高齢のママをはじめ、マスターと5人いるホステスの平均年齢70歳という「高齢バー」だった。その日から昼間の倉庫係と夜のホステスという新の二重生活が始まっていく。



「OLD JACK AND ROSES」は、移民として幼少時にブラジルに渡り、戦争初期の混乱の中、日本に戻ってきた「ジルバ」と呼ばれる女性が構えた店だ。新が店に入ったときにジルバママはすでに亡く、壁にかけられたおおらかに笑う写真だけが彼女との接点だった。やがて店で働く人たちの語りから、少しずつジルバの人生や、店の人たちの人生がひもとかれていく――。

ブラジルへの移民が盛んだった1920年代～30年代の日本は、第1次世界大戦後の恐慌に関東大震災などが重なり、失業者であふれていた。当時、不況で混乱するブラジルへの移民をやめるように西欧東欧諸国が警告していたにも関わらず、政府と移民会社は「暖かく土は肥え、南米は楽園」と呼びかけ、19万人もの人々が新天地を求め、いつか一旗揚げて日本に戻る日を夢見ながら、海を渡っていったという。

ジルバの写真の下に、古びた風景が映る記事の切り抜きが飾られている。海を望む丘に背中を丸めてたたずむ人々は、船上で亡くなった人々を埋葬しているという。そこには航海中に夫と娘二人を亡くし、くずおれるジルバの姿もあった。船で逝った人は海に流すのが慣例だが、ジルバたちは船長にお金を渡しながらかつて、日本を目前とした途中の島に船を停めてもらったのだ。日本に帰り落ち着いたら、再び掘り起こして故郷に埋葬するために。

きらびやかな店の内装に不似合いな切り抜きを貼っている理由をたずねる新に、マスターは「ジルバが逝っちゃったらこの人たちも忘れ去られちゃうだろ。ここに貼っときゃジルバと一緒にこの店にいられる気がしてな」と静かに語る。

作画やセリフがコミカルなので、軽いノリで読めると思っていたが、読み進むにつれ、戦前、戦後を生き抜いた人々の、壮絶な人生に圧倒される。完結まで7年を要した物語は、ブラジルと日本、そして作者の故郷である福島の震災後を生きる人々の姿をからめ、過去と現在を行き来しながら、丁寧に編まれていて読み応えがある。

人は、語ることによって辛い記憶を解き放つ。だがそれは再度痛みを覚えることでもある。

聞く者は、ただ静かに耳をかたむける。そして次世代へとつないでいく。それが聞いた者の役割であるとの作者のメッセージが、読んだ者の心に響く。



NHK テキスト『100分de名著』（三木清 人生論ノート）

岸見一郎著、NHK 出版、2018年11月、524円＋税

NHK 教育で毎週月曜夜に放送されている番組「100分de名著」をご覧になったことがあるだろうか。この番組はタイトル通り「100分で名著」を紹介するというもので、2011年から放送されている長寿番組だ。古今東西の名著を4回（1回25分）に分けて解説する。タレントの伊集院光とNHKのアナウンサーが、専門家から解説を受けるという構成なので、分かりやすい。今回紹介するのは、岸見一郎が三木清の『人生論ノート』を解説した際のテキストブック（以下、本書と呼ぶ）である。岸見は著書『嫌われる勇気』（ダイヤモンド社、2013年）などで海外でも有名な心理学者、哲学者である。



『人生論ノート』の著者、三木清（1897～1945年／現たつの市出身）は日本を代表する哲学者のひとりだ。1930年に共産党へ資金提供したとして治安維持法違反の容疑で逮捕され、大学教授の職を追われる。以後、在野の哲学者として活動した。その著作は、検閲により何度も削除、不掲載とされ、発禁となったこともあったが、積極的に執筆を続けた。しかし太平洋戦争開戦直後に発表した文章が軍部の怒りを買って、発表の場を失っていくことになった。そして1945年3月、友人の共産党員を匿った容疑で検挙され、敗戦1か月後に拘置所で衰弱死する。三木の死は、治安維持法の廃止の契機になったとされる。

三木の著作のなかで、最も読まれているのは『人生論ノート』であろう。特に若者に読まれた。しかし、文庫本になっているとはいえ、読みやすい文章ではなく、今ではそんなに多くの読者がいるとは思えない。『人生論ノート』を紹介する岸見自身も「戦争の記憶とともに三木の名も霧中に消えつつあるように感じます」と述べている。しかし、岸見は「彼がこれを書いた当時と今の社会状況が酷似して」おり、「今という時代にこそ再読されるべき一冊と思います」と言う。「彼がこれを書いた当時」とは、日中戦争の真っ最中、太平洋戦争開戦直前の時期である。戦時体制が強化され言論弾圧が激しくなっていくなかで、雑誌『文学界』に1938～1941年まで連載したエッセイを、1941年8月に単行本として刊行した。

エッセイ集とはいえ、『人生論ノート』の文章は難しい。岸見によると、「たびたび不掲載や発禁処分を受けてきた三木は、哲学用語やレトリックを駆使して晦渋な書き方をするほかなかった」ためだという。そういった本だからこそ、優れた解説者の手引きにより読んでみてはいかがだろうか。

『人生論ノート』は70年以上昔の本であるが、本書は、岸見の現代社会に対する危機意識が濃厚に反映され、徹底的に今という時代にひきつけた読み方が提示されている。もちろん、岸見の書いていることは、あくまで岸見の解釈であって、それだけが正しい読み方というのではない。過去には過去の、未来には未来の読み方がある。多様な解釈ができる著作でなければ、いつの時代も読まれる古典、名著になることはできないのだ。最近影の薄かった『人生論ノート』も、岸見という卓越した読み手に解釈されることで、新たな読者を獲得し生きながらえていくことだろう。

「100分de名著」の『人生論ノート』の放送は、2017年4月であるが、2018年11月にアンコール放送をされたので、今ならまだテキストの在庫はある。後に単行本化する可能性もあるが、興味を持たれた方は早めに購入されることをお勧めする。また、龍野の旧城下町にある霞城館では、三木に関する資料を展示しているので、お近くの方は尋ねてみてはどうだろうか。（Ka）

2018年度『人権セミナー』

第6回 シンポジウム「血筋？土地？部落民とは誰なのか」

日時：2019年3月9日（土）14：00～16：00 場所：のじぎく会館（ふれあいルーム）

講師：住田一郎（部落解放同盟住吉支部員）、石元清英（ひょうご部落解放・人権研究所所長）

2019年度『人権セミナー』

ひょうご部落解放・人権研究所では、2019年度もセミナーを開催します。以下のテーマで開催予定です。日程、テーマ名称は未定です。内容及び講師は変更される場合があります。ご了承ください。

「部落の所在地を問うこと、伝えることがすべて差別なのか」（シンポジウム）

講師：細田勉（部落解放同盟兵庫県連合会副委員長）
住田一郎（部落解放同盟住吉支部員）

コーディネーター：

石元清英（ひょうご部落解放・人権研究所所長）

「ジェンダーとメディア」

講師：石元清英（ひょうご部落解放・人権研究所所長）

「メディアと人権」 *講師は調整中です

「部落問題と向き合う若者たち」

講師：内田龍史（尚絅学院大学教授）

「被差別部落と結婚差別」

講師：齋藤直子
（大阪市立大学人権問題研究センター特任准教授
／『結婚差別の社会学』（勁草書房）著者）

■参加資料代：【一般】800円

【会員・定期購読・学生】500円

■お申込・お問合せ：（社）ひょうご部落解放・人権研究所
TEL:078-252-8280 メール:blrhyg@extra.ocn.ne.jp

●人権教育ひょうご春季学習会

「どんな性の在り方も排除されない園・学校・職場・地域とは？」

日時：3月16日（土）13：30～（13：00～受付） 場所：ラッセホール（サンフラワー）

講師：田中一步、近藤孝子（セクシャルマイノリティの子どもたちの居場所づくり にじいろ i - Ru）

主催：人権教育ひょうご（「人権教育のための国連10年」兵庫県推進連絡会）

連絡先：兵庫県教職員組合 教文部 神戸市中央区中山手通4丁目10-8 〈TEL〉078-241-2345

事務局から

- 今年は景気が後退するとか。今はまだ好景気だそうですが、報道で話をきくだけで特に実感がありません。不景気も実感なく過ぎればよいのですが、……無理なんでしょうね（Ka）
- 今年のセンター試験、日本史Bの問題に全国水平社が出題された。平民社との二択。正答率が気になります。（K）
- 毎日の楽しみ…(≡・≡)、(≡・≡)、(≡・≡)、(≡・≡)と遊ぶこと。。(≡・≡) タッチやダッコやナデナデや色々。癒され元気をもらっています。（I）
- 昨年は性犯罪に関する刑法が110年ぶりに改正。様々なセクハラ被害も報道され、性暴力被害を告発する「#MeToo（私も）」運動も一定の広がりを見せた。それぞれに被害者がいる。その恐怖と苦しみと、力と勇気を思う。#MeToo！（H）